

【特集】「状況」から出発する日本語教育

「状況から出発する」アプローチの実現 —初級日本語学習者用ライティング教材の作成過程から—

大和 えり子

要 旨

本稿では、「状況から出発する」日本語教育のアプローチをウェブ教材作成という方法で実現していくにあたり、具体化してきた学習項目について検討する。特に初級学習者を対象にしたライティング教材では、「(1) アルファベットキーを使って打つプロセス」、そして、「(2) 打つ（書く）コミュニケーションで使われる表現の状況における意味」を教材化していくことが重要性であることを主張する。

キーワード

状況 初級日本語学習 ウェブ教材 打つプロセス 状況における意味

1. はじめに

近年、コミュニケーション重視の日本語教育に役立つような研究の不十分さ(野田 2012)や、これまでの日本語教育のシラバスが構築されてきた「言語から出発する」アプローチにおける問題点(小林 2017)が指摘され、実際の「状況」や「実生活」という言葉をキーワードに、コミュニケーションのための文法を抽出し教材化する試みが行われている(野田他 2017、桑原 2018 等)。こうした試みは「言語から出発する」アプローチによって構築された文法を学習しているだけでは、実際のコミュニケーション能力が付きにくいという日本語教育現場の課題を克服しようとするものである。本稿では、実生活上の「書く」状況の調査で得られた知見を教材化していくにあたり、初級教材の学習項目として具体化してきた以下の点について検討する。

- (1) アルファベットキーを使って日本語を打つプロセスの教材化
- (2) 打つ（書く）コミュニケーションで使われる表現の状況における意味の教材化

2. 打つプロセスの教材化

2.1 打つプロセスとは

状況調査では何かを書く行為は、「手書き」をするよりも「打つ」ことのほうが多くなっていることが再確認されたが、日本語入力是他言語の PC リテラシーを転用するだけではすぐ習得できない。ある表現を日本語の文字としてスクリーン上に出すには、少なくとも二つの段階を踏む必要がある。それはキーを打つことと、変換候補に出てきた表記から適切なものを選ぶことである。このうちキーを打つことに関しては、日本語母語話者（以下 NS）と非母語話者（以下 NNS）には実際に発音される音と、それを表す表記の呼応に認識の違いがあることに留意する必要がある¹。NS は各表現の実際の発音をもとに、それをローマ字化する法則に従ってアルファベットのキーボードに入力したり、音韻表記のひらがなのキーで入力したりする。しかし、例えば「つ」の音を聞いてどの NNS も TSU か TU というつづりを連想できるわけではない。実際の音をアルファベットに変換する法則は母語によって異なり、ローマ字のヘボン式の法則と呼応していない。現行の総合的な日本語教育では、ひらがなとローマ字の対応を覚えてから書く練習をすることが一般的であるが、ここでは、聴覚的に覚えている発音を文字に変換することを「打つ」ことと考えるのではなく、キーボードにあるアルファベットの組み合わせである「打つ」つづりを、日本語表記に変えてスクリーン上に映し出すことを「打つ」ことと考えることを提案する。

2.2 打つ学習の可視化

ひらがなとローマ字の対応表を使わず、ある表現の「打つ」つづりを学習するには、実際にキーボードを使った練習ができる教材が必要である。そこで、初級表現を書くことを学習するレッスンには、以下の 3 つのスキルを提示し、それらの練習問題を含むウェブ教材を試作した。図 1 は「今から行く」という表現を学習するレッスンの始めの画面である。

[スキル 1] 表現の表記を視覚的に覚える

[スキル 2] アルファベット表記のつづりを見ながら打ち、覚えた表記に変換する

[スキル 3] アルファベット表記のつづりを覚え、覚えた表記に変換する

[スキル 2、3] にある「変換する」という行為は、候補として画面上に出てくるいくつかの表記の中から一つを選ぶことであり、紙媒体の教材では練習が難しい。

また、アルファベットの「打つ」つづりは、その表現が使われる状況における意味的なまとまりと同じもののほうが良いと考える。図

1 のレッスンでは、「今」「か

目標
待ち合わせ場所に向かうために、今いる場所を出ると知らせることができるようになります。
状況
数時間前、友だちと出かける約束をし、友だちの家の近くで落ち合うことにしました。自宅を出るときに、そのことを知らせます。
スキル 1 今いる場所を出ると知らせる表現を覚える
スキル 2 「今から行く」と入力するためのつづり < imakaraiku > を打つ
スキル 3 「今から行く」と入力するためのつづりを覚える
スキル 4 待ち合わせ場所に向かうために、今いる場所を出ると知らせる

図 1 「今から行く」という表現のレッスン画面

ら」「行く」と分けて変換していくことを練習するのではなく、「今から行く」を一つのまとまりとして変換することを学習するのである。更に、この変換する単位を決めるには、実際に PC やスマートフォンで変換するときに、一度に変換できるかということも確かめる必要がある。昨今変換ソフトの発達により、適切なつづりを打っていけばよく使用される表現は自動的に表記が画面に出るようになってきている。つまり、ある日本語表現を打つには、適切な「打つ」つづりを知っているかということが重要になり、つづりを打つという過程を可視化した学習教材が必要ではないかと考えたのである。

3. 状況における意味の教材化

3.1 接触場面の調査から状況分析へ

それでは変換する単位を決めるのに関係しているある表現の状況における意味とは何か、それを抽出するには何が必要か。まず、言えることは「書く」コミュニケーションが使用される場面²が明らかになっても、どの表現を教材として取り上げるかを決めるには更なる状況分析が必要だということである。

図1のレッスン作成前、待ち合わせという場面では、通話ではなく LINE アプリのメッセージなどがよく使われるということがわかったが、实例を見ると様々な表現が使われており、一見どんな表現を使うかは個人差であるように見受けられた。しかし、NNS と NS の実際のやり取りへの振り返りをもとに、双方の使用している表現を分析していったところ、相手の居場所や待ち合わせ場所までの所要時間などを把握するのにポイントとなる表現が浮かび上がってきた³。時間や場所をはっきり決めず、やり取りをしながら最終的に落ち合うという LINE を使用した待ち合わせ場面では、NS は主語や場所を省いた短い表現を使いながらも、相手が今どの辺にいるのか、移動時間がどのくらいなのか把握できていた。一方、NNS は短い表現からそれらを把握することはできず、事実を確認しながら次の行動を決めていた。この結果を受けて、このポイントとなる表現が送信された前後の詳細を抽出し、その表現の意味を再分析することとした。

このいわゆる状況分析では、ある表現を送信する前の出来事の詳細・送信したときの時間・その後の出来事を列記した。待ち合わせ場面でポイント表現となっていた「行く」を含む表現の分析からは、「どこに行くのか書いてない場合はその前のやり取りで場所がわかっている」こと、「今から」と「今」が使われている場合は双方が「所要時間がわかっている場合」であり「相手への返信」が多いことがわかった（副田・大和 2018）。これらは、「今から行く」と「今行く」という表現が使用される状況の共通項であり、この表現には NS 間に共有されている待ち合わせ場面における意味があることが示唆された。

3.2 状況における意味とは

次に「今から行く」と「今行く」という表現を学習するレッスンの作成過程を例とし、状況における意味とは何か述べる。前述の状況分析で、待ち合わせ場面で主語・行先・所要時間を表す表現とは使用されない「行く」という表現が、「今いる場所を出る」という意味で使用されているということがわかった。つまり、LINE によるやり取りでは、その表

現を送信した時間により、相手の到着時間が予測でき、待ち合わせが完結できるのである。

しかし、「今から行く」と「今行く」はどのように使い分けるのかという問いが生じた。そこで、この二つの表現が使用されている状況を比較したところ、大学内のやり取りには両表現が散見されるが、大学外のやり取りでは「今から行く」しか使用されていないかった。例えば、「今から行く」が使用されている状況には以下のようなものがあつた。

(A) 車で迎えに行けるかどうかのやり取りが2時間ぐらい前にあり、車で迎えに行く方が家を出るときに「今から行く」と送信した。

(B) 相手からの「どうするんや」という9時7分のメッセージに「ごめん、今起きた」と返信し、その後、持参するものなどの打ち合わせなどを経て、10時8分に「今から行く」と送信した。

これに対して、「今行く」が使用されていた状況は、相手が食堂の1階の真ん中・1階自販機の脇などと大学内の自分の居場所を知らせてきたあとに「今行く」と返信するものであつた。つまり、「今」とだけ書くことで、到着するのにかかる時間が短い、すなわち「すぐ着く」という意味合いを含み、居場所を明記しなくても、待ち合わせ場所から遠くない場所にいることが推測できるのである。

この分析結果を受けて、「今行く」と「今から行く」は別々のレッスンとして扱い、それぞれのレッスンには違いを端的に示す状況を記述することとした。図2は「今行く」を学習項目としたレッスンの始めの画面であり、「今から行く」のレッスンとは異なる状況記述がある。図3は図2のレッスンのスキル1の画面であり、「今行く」という表現の状況における意味の記述した。スキル1は前述の打つプロセスの表記を、その表記の意味とともに覚えるステップである。この画面には、形態素の辞書的な意味と、その表現を書いた人と読む人が共通に思い浮かべる具体的な事象、書き手が「今いる場所を出る」とそこから派生する二次的事象、待ち合わせ場所には「すぐ着く」を明記した⁴。この記述はNSが無意識に使用している状況における意味であり、学習者のために教材化するべき項目であると言えるのではないだろうか。

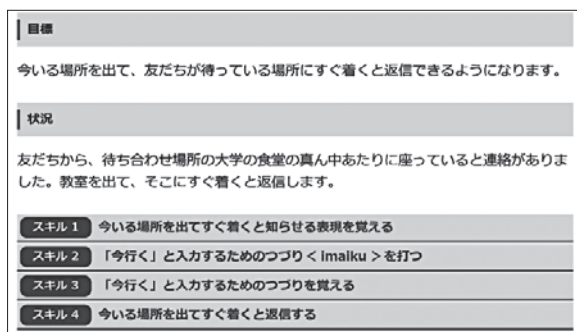


図2 「今行く」という表現のレッスン画面

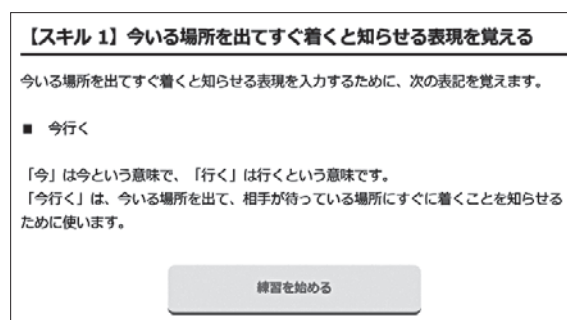


図3 図2のレッスンのスキル1画面

4. まとめ

こうした実際に「打つ」プロセスの練習を盛り込み、「打つ」ときに使用する表現の状況における意味を記述した学習教材はこれまでにはない。では、「状況から出発する」アプローチで学習教材開発する努力をせず、「言語から出発する」アプローチに依存し続けていくとどうなるのであろう。それは結局、これまでの長年の言語教育を改善する様々な試みにもかかわらず、「目標言語のすべての単語には、呼応する母語の翻訳がある」（小林 2019 : 158）を前提としている伝統的な文法翻訳法から向け出せないということではないか。まず、状況から切り離された語彙の意味や文型を学習し、中上級になってから、実際の NS とのコミュニケーションの中で間違いや戸惑いを繰り返しながら、実用的な日本語を習得していくという、長く険しい言語学習の過程を学習者にたどらせ続けなければならないということであり、学習者のために飛躍的な進歩を提供したことにはならないのではないだろうか。

注

- 1 野田・中北（2018）はヘボン式ローマ字の表記と英語表記の発音の違いを指摘し、英語話者はヘボン式ローマ字の発音の仕方を学習しなければ、ローマ字で書かれた単語を適切に発音するのは困難であると指摘しており、小林他（2015）は、英語とイタリア語の「音として産出するためのローマ字表記」は異なるという調査結果を示している。
- 2 ここでは待ち合わせなどの大まかな状況を指す場合は「場面」という表現を使用する。
- 3 副田・大和（2018）の調査では、台湾人留学生 12 名と日本人学生 27 名から LINE のトーク画像 622 枚を任意に提供してもらい、聞き取り調査を行った。その後、LINE のやり取りの中で比較的多かった待ち合わせ場面に絞り、NS 同士（提供者 8 名）のトーク画像を 65 枚追加し、「行く」「着く」「着いた」を含む表現の状況を分析した。個々の表現の状況分析の詳細は今後出版物として公表する予定である。
- 4 すべての教材の画面は英語や中国語などに翻訳されることとなっており、特に初級学習は翻訳された指示や説明を読みながら学習を進めることとなる。

参考文献

- 桑原陽子（2018）「研究最前線 初級日本語学習者対象の読解教材支援のための教材のありかたを考える：スタンプカードを読むための教材をモデルとして」『ことばと文学』9、日本のローマ字社、pp. 127-136
- 小林ミナ（2017）「状況から出発するアプローチ」『早稲田日本語教育学』22、早稲田大学大学院日本語教育研究会、pp. 101-113
- 小林ミナ（2019）『日本語教育よくわかる教授法：コースデザインから外国語教授法の史的変遷まで』アルク
- 小林ミナ・藤井清美・柳田直美（2015）「会話教材におけるローマ字表記：英語/イタリア語の母語話者を事例として」『早稲田日本語教育学』19、早稲田大学大学院日本語教育研究、pp. 1-19.
- 副田恵理子・大和えり子（2018）「書く言語的スキルとは：LINE による待ち合わせ場面の分析から」、（2018 年 1 月 28 日）『具体的な状況設定から出発する日本語ライティング教材の開発』研究発表会発表資料（国立国語研究所、東京）
- 野田尚史（2012）（編）『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版

野田尚史・阪上彩子・中尾有岐・太田ゆか (2017) 「実生活に役立つ初級聴解ウェブ教材の作成」 (2017 年 8 月 5 日) *The 7th International Conference on Computer Assisted System for Teaching & Learning Japanese* (早稲田大学、東京) Proceeding, pp. 30-39

野田尚史・中北美千子 (2018) 「英語アルファベットによる日本語音声表記」『国立国語研究所論集』15、pp. 135-162

(やまと えりこ ロイヤルメルボルン工科大学ベトナム校)